

- Chim. Acta*, **131**, 255 (1981).
- 28) B. K. van Weemen and A. H. W. M. Schuurs, "Principles of Enzymatic Analysis" (H. U. Bergmeyer, ed. ), Verlag Chemie, Weinheim and New York, (1978), 山羽 力, 早川堯夫, 谷本 剛共訳, 広川書店, 東京 (1984) p. 126.
- 29) 北川常廣, "酵素免疫測定法", 蛋白質・核酸・酵素, 別冊 No. 41, (1987), p. 46.
- 30) 佐藤生男, 川崎政芳, 菅原茂樹, 未発表.
- 31) 松原高賢, "臨床化学分析 V—電解質—" (北村元仕, 斎藤正行, 丹羽正治共編), 東京化学同人, 東京, (1976), p. 106.
- 32) 佐藤生男, 木村伸一, 未発表.

## 書 評

### 新 熱測定の進歩 I

日本熱測定学会編  
リアライズ社, 158頁, 8,000円(消費税込)(1990年)

近頃はどうかやデータベースが大流行のようである。「○○の情報サービスのためのデータベースの構築」というタイトルをつけておくとかなりふんだんに予算が出るようであるし、何よりもパソコン雑誌は「データベースソフト」の記事に満ちている。にも拘らず、最も利用されていると思われる新聞記事のデータベースすら利益を上げていないことが疑問とされえないのは不思議である。

熱力学は現象論であるから、特定の物質に関する熱力学関数をそれ自身の枠組の中から導出することはできず、観測値から定めなくてはならない。しかも、熱力学の関係式が成立していないことが多い。ファクトデータベースの中で最初にまとめられたのが熱力学データを主体とした International Critical Table であったことにはこのような背景がある。

コンピュータの普及とともに熱力学データベースも印刷物からコンピュータ用の記憶媒体に載せられるようになってきた。このことは、熱力学データそのものに価値があるのではなく、それを用いて計算を行った結果に価値があるのであって、ユーザの計算に便利な形で提供しようということに他ならない。

このような時期にあたり「熱測定の進歩」が「新熱測定の進歩」と粧を改め、最初の特集としてデータベースを取りあげたのは、時宜を得た企画と思われる。特に、データベースの構築に関する問題よりもデータベースをどう使いこなすかという観点に力点が置かれており、酸化物、硫化物、複合酸化物、化合物半導体、熱媒流体等実用上重要な材料に関する最近の進歩が懇切に解説されているのは嬉しい限りである。

また、これらの応用のサポートとなる熱力学データベースの世界各地の最近の情況も紹介されており、より信頼性の高い熱力学データへのアクセスのためには有用な指針となろう。

熱力学データの実用上の重要性は本特集の随所に強調されているが、データを製造する立場にある熱測定の専門家はその対象を「興味ある化合物」、「新しい現象を具現する化合物」に絞りがちである。このような「測定屋」の方には、実用上の要請に應えるためにも是非御一読願いたいものである。

データのユーザーにとって、本特集を一読すれば熱力学データを使いこなせるようになるといえば嘘になるであろう。熱力学の基本の理解なくして「使いこなす」ことはとうてい不可能である。しかし、そのための良い刺戟となろうし、学習のためのヒントともなろう。この意味では、本特集が本会会員以外で熱力学を必要としている人達に広く読まれることをも期待するものである。

(国立身障者リハビリテーションセンター 山内 繁)